

## 壇上報告 1-1

榊原 賢二郎 東京大学

#報告題目 障害評価の社会構造——無作為郵送調査で評価された障害の社会的重度性と障害分類

#報告キーワード 社会的排除 職業威信 障害種別

#報告要旨

本報告では、障害学会で2017年に報告させていただいた「障害スコア」(榊原 2017)を、無作為郵送調査によって測定した結果を提示する。前回示した数値は、オンラインの予備調査による数値であった。今回は本調査として、対象者をランダムに選ぶことで、より信頼可能なデータを提示する。また今回は、得られた回答を因子分析にかけることで、社会的排除との関係で浮上する身体を、従来とは異なる形で類型化する。

各種障害が伴う社会的排除の程度を(社会的)重度性と呼ぶならば、それを測定するのは社会統計の仕事である。しかも、従来の医学的方法が、(全盲と弱視のような)障害種別内部の重度性を比較するに止まるのに対し、社会統計は、(視覚障害と聴覚障害のような)異なる障害種別間の比較もできる。各障害種別の社会生活への影響が異なる可能性を考えれば、こうした測定は重要であり、本報告はその一方法を開拓する試みである。

測定方法には、実態に基づく客観的方法と、人々の評価に基づく主観的方法がある。客観的方法には、障害種別ごとの出現率の低さなどの制約がある。そこで本報告では、職業威信スコア(Treiman 1977)のような主観的方法を適用する。

調査対象は南関東在住の20~79歳の男女1000名で、有効回答253件(25.3%)であった。実査は一般社団法人中央調査社に委託した。本調査は早稲田大学倫理委員会の承認を受けた。個人情報保護(調査会社のみで管理)や統計的処理(回答を個別に扱うわけではないこと)などを説明した依頼状の添付と、より詳細な倫理面の説明書類のWeb公開(依頼状にURL記載)、台帳閲覧の条件となった単純集計結果の即時公開を行なった。

質問票には日常語で表現した(「目が見えない」など)33の身体的条件を挙げ、それらが社会生活(仕事や学校生活、結婚や育児など)にどの程度不利になると【思う】かを、一般論として尋ねた。「まったく不利にならない」(1)から「非常に不利になる」(6)までの6

件尺度を用いた。1=0点、2=20点、……6=100点と変換した。平均値を障害スコアと呼ぶこととする。

回答の度数分布は、各種別で平均の周りに集まった。平均値である障害スコアは、「目が見えず、耳が聞こえない」(94.3)から「髪の毛がない」(29.8)まで幅広く分布し、主観的重度性の障害種別間の差異が示された。感覚・身体障害、知的障害が上位に来る一方、精神・発達障害は一部を除き全般的に中位に、容貌の異形は軽度に、回答者によって評価された。

この尺度の信頼性・安定性を検討した。属性別のスコアの相関係数、2組の障害スコアの相関係数の期待値、また個別水準での相関係数・級内相関係数などから、一定の信頼性・安定性が示された。主成分分析の結果、障害スコアに類似する総合尺度としての第一主成分は、データに含まれる情報のおよそ半分を説明していた。また、個人の評定(1-6)が属性によって影響されるかどうかを、線形重回帰で検討したところ、モデルが5%有意となったのは障害種別33種類のうち3種類のみであった。全般的には、属性による系統的なバイアスは生じないと言える。

こうして得られた重度性評価データを因子分析にかけた。この因子分析は、強く関連しあっている変数を分類することを可能にする。三つの因子を抽出したところ、いわゆる身体障害は第一因子、いわゆる精神障害・発達障害、依存(飲酒・喫煙)は第二因子、容貌の異形は第三因子に入った。認知(「言葉を理解できない」「新しいことを覚えられない」)は、主に第一因子に関わりつつ、第二因子にも関連していた。この分析は、身体の諸側面について、身体・精神・知的(障害)や可視的/不可視的とは異なる分類を示しており、例えば道具的障害、内面的障害、外形的障害と解釈することができる。

榊原賢二郎(2017年10月28日)「障害スコアの数值と信頼性に関する予備的考察——障害の重度性の測定に向けた試み」障害学会第14回大会。

Treiman, D.J. Occupational Prestige in a Comparative Perspective. New York: Academic Press, 1977.

